

島の傳説 : 隨筆

著者	村吉, 佐江綱
雑誌名	龍南
巻	2 2 0
ページ	3 9 - 4 4
発行年	1932-01-20
その他の言語のタイトル	島の伝説 : 隨筆
URL	http://hdl.handle.net/2298/7049

島の傳説

村 吉 佐 江 綱

七、八月の休みを利用して薩南諸島を旅行し廻つた。その中に大島と言ふ島がある。鹿児島市から二百五哩もあつて附近では稍々大きな島であり、凡ゆる近世的文化文明は此の島を経て各島へ傳へられる。

近來此の島一帯は海軍の要塞地區の一つとも成り太平洋時代が叫ばれるやうになつてからはその名は廣く世間に知られた。他の方面の事は扱置き、一民族の時代心理や民性を識る上に於て又、民族文化の移動進出の經路を識る上に於ても缺くべからざる資料となる傳説——その傳説の一つを紹介しよう。

「戀の娘カントメの死」

戀の娘カントメの話は今から約百十年前のことであるが、彼女の死後有名な歌作りが出て此の悲歌を哀調もて歌つて以來、カントメの死は美化され全島の人の口に詠まれるやうになつた、と言ふ。

南島民族の開祖アマミコ、シネリコの兩神の降臨地と言はれる大島唯一の高峯湯灣岳（七〇一米）と左手に望み湯灣の入海に面した至つて靜かな平和な部落がある。名柄と言ふ村である。此の部落の或る豪家に島でも稀に見る美人の膝（奴隷）があた。名をカントメと言つた。

湯灣岳を一つ越えたと最も曲折の多い内海（今では要塞地帯）に久慈と言ふさゝやかな部落がある。昔こゝに藩役所があつて村治を司つて居たのである。此の役所に筆子（書記）を勤める岩加那と言ふ青年があた。彼は公用で屢々名柄にも來た。或機會

からして岩加那はカンテメの主家へ立ち寄つたのである。その夜主人は若き岩加那の爲めに大なる宴會を開いた。大島では酒宴に蛇味線（三味の一種）（蛇皮線トモ言フ）は附きものである。そして蛇味は男子が盡くこれを弾き、村の娘はこれに和して歌を歌ふのである。岩加那は本職の筆記よりもこの蛇味を弾くことを得意としてゐたから、大いに其の手腕を發揮して酒宴に興を添へた。その妙音に魅せられて集まつた名柄の娘達は、眉目秀麗な岩加那と彼の眞に迫る藝術とに如何に南國の若い血を燃やしたことであらう。單純な南國の若い娘達の心の煩は戀に燃え易い。村一番の美人で、歌ひ手のカンテメは主命に依り岩加那の前に引き出された。彼の蛇味に合せてカンテメは心から嬉しく愉快に歌つた。この時から若い者同士には戀が芽生え始めた。岩加那とカンテメ、蛇味と歌、彼等の戀は益々白熱化して來た。と同時に村中は彼等の噂で持ち切りであつた。且つそれは島の感情的な熱し易い若者達の美望の的ともなつた。

それから岩加那は蛇味を抱いて夜毎に名柄のカンテメの許に通つた。

ニゾカウムカギニ

引カサリテワ身ヤ

重ネ顔カクチ

忍ンデイチユイ（スーリ）

重ネ顔カクチ

忍ンデ行ントニ

ウジヨ迄ハイデリ

ウムヒ語ラ（スーリ）

貴嬢の面影に

引かされて我身は

いつも顔をかくして

忍んで行くのである。

何時も顔をかくして

忍んで行くのであるから

せめて門口迄出なさい

想ひを語らう

（スーリは歌尾の辭）

と言ふ歌がある。岩加那が蛇味に和してこの歌を歌つたかどうかは知らぬが、よく島民の口にする歌である。

宵闇が迫つて津々浦々が全く夜の領分となる時、裏山のヂグザグの路を辿つて来る岩加那の焚松が、待ち焦れたカンテメの情熱に煽られた兩の眼に映する時、彼女はそつと主家を抜け出して愛人の下へ通ふのである。そして彼等は心ゆく迄でそのおもひを湯灣岳の麓の芝生の上で深更までも語り續けるのであつた。

此處に彼等の蜜のやうな日々の娛しみを邪魔する事件が起つた。

カンテメの主人がその妻に逝かれたことである。主人は極度に孤獨を感じた。平生からカンテメの美貌に心を惹かれてゐた主人は、妻の死後度々彼女に言ひ寄つた。然し主人の權力も助力も恩義も純真一徹の南國娘カンテメの戀の前には餘りに無力であり無價値であつた。主人は彼女の奴隸の身分を止めて正妻にしようと言つたがカンテメはそれにも應じなかつた。手を變へ品を換へて言ひ寄つたが終に要求の容れられ無かつた主人は可愛さ餘つて憎さが百倍、刎頭彼女の外出を禁じた。失戀の傷を負うた主人の復讐は外出禁止位では止まなかつた。カンテメは納屋に監禁されて虐待されたのである。

或夜カンテメは何者かに盗み出された。主人は村の若い衆を集めてカンテメの行方を探させた。カンテメは岩加那に盗み出されたのである。カンテメを再び手に入れた主人は又もや納屋に監禁してカンテメに最後の凌辱を加えた。純真を奪はれた乙女カンテメは悲歎悶絶の末その夜主人の惨虐を恨みつゝ縊死を遂げた。

此の世に終世自由の得られぬカンテメは、死んでより廣きより大きな自由の野に彷徨せんことを求めた。

其の後も岩加那は愛人の惨死を知る由も無く例の如く蛇味を抱いて名柄へと夜道を急いだ。凄い程冴えた月が岩加那の上にもその愛人の家にも等しく照り渡つた。山道を急ぐ彼の耳にはフクロの悲しげな聲が聞えた。何とは無しに哀を催す夜ではある。月明りの道にハラ／＼と散る木の葉の音が妙に岩加那の心をザワつかせた。

岩加那が名柄へ着いた時、カンテメの主家の門口では村中の人々が集つて色々な下馬評をして騒いでゐた。事の真相をきいた岩加那はカンテメの死体に取りすがつて泣いた。

純真一徹の南國娘カンテメは斯くして死んで行つた。

其の後岩加那は度々幻に愛人の姿を見たと言ふ。

カンテメの歌は斯くして生れその哀歌哀調は今も尙島人の口に上る。その始めの一節に

カンテメは名柄、岩加那は眞久慈

戀路隔めとて、思ひの深さ

と言ふのがある。その終りの一節に

おなごぬ子や あまりきぢるなよ親兄弟んきや

名柄カンテメ 死様見ちやめ

解(女の子を持つ親兄弟達よ、余りに嚴しくはいけない。名柄のカンテメの死様を見たか)と言ふのがある

×

×

×

×

南國情緒の最も豊かな詩と歌と踊りの國である大島々民は、古來幾千年來畫は野に山に、そして又海に日々の生計の道にいそしみ、夜は哀調を帯びた蛇味線を弾いて歌ふことを唯一の樂しみとして來た。

夏から秋へかけて南國特有の青白い月がいよく、汐え渡つて來ると島の到る處で若い者同志が集つて蛇味と歌と踊りの樂園が展開されるのである。去臘大島を視察された大毎新聞社の經濟部長下田將美氏は大島の民謡を評して次の如く言はれてゐる。

：：月明りの夜、南國の孤島の磯に何處ともなく流れて來る蛇味の音と泣くが如きかうした大島の民謡を聞く時、恐らくは何人も水の如き哀調の胸迫るを覺えぬものは無いであらう。私は未だ嘗つて大島の島民の歌ふ唄ほど世にも寂しくて悲しい調子に充ちたものをきいたことがない。舊約をひもといてエレミヤの哀調を讀む時國を失つて虐げらるゝユダヤの民の流浪の末に胸打たるゝものがある。大島の民謡と歌調とは正にこの哀調を忍ばしめる……

又茂野幽考氏は次の如く述べてゐられる。奄美大島の島々に住む二十三萬の人達は其の昔慶長十四年から明治四年の廢藩置縣に至る迄約二世紀半の間、血も涙も無い薩摩の武官政治の下に在つて奴隸生活を續け、苦しみの限りを嘗めつくして不幸な厭世

的宿命的人生を送つてきた。世にも哀れな一つの民族が永い間南海の孤島に閉ぢ籠つて只々日々の生計の苦しみと、山に毒蛇、海に暴風、慄うした自然的恐威におのゝき乍ら果敢なき人生を見つめてきた。その悲しみを慰めるものは酒と蛇味線と、戀と歌とであつた……そして奄美大島を経廻つて採取した三千余首の歌には萬葉や古今集に收録された歌以上に雅趣と情味をもつた歌が多い。そして記紀萬葉その他の國文學書に綴られた古代和詞が數限りなく大島の民謡に歌ひ込まれてゐるので古事記や萬葉の難解の古語は大島民謡の研究に依つて容易に解釋される場合が多い……と。

私は又大島から五十湊位隔つた島へも行つて見た。人情が濃やかで純真で素朴である。道や泉で遭つても必ず禮をし挨拶をする、泉と言へば此の島の人々には又一つの楽しみであり慰めである。一日の仕事を終へて土まみれになつた体を休めたりして彼等の寶である牛馬に水を飲ませる處である。此の島には風呂も無いではないが老弱男女擧つて泉に水浴みに行く。南國の泉を紹介しませうか。

それは見たことの無い人には一つの夢であり、大きな疑問でもある。然し事實である。それはアラビヤ風俗を描いた講なぞによく見るそのまゝの姿である。地上に現はれてゐる泉もあり、地下四、五十尺も下りて行つて始めて冷い泉につかることが出来る地方もある。飲み水は一般に此の島の婦人が桶に入れて頭上に載せて運ぶのである。數十尺も地下にある洞窟で燈をともして水を汲み、水浴みをし洗濯をする。

地表の泉でも同様である。が此處では村の乙女達是一般に夕方になつて水浴びに来る。それで若い衆もそろ／＼この時刻に月影をふみつゝやつて来る。

泉のほとりに一本の名も知らぬ南國特有の木がおいかぶつてゐます。その里を月影が漏れて若人の満身を照し出す。

「クオ、ブデイス」のヴィニキウスはリギアが庭の泉で水浴びをしてゐるのをちらと見て後で叔父なる人に告げてゐる。「……あの女の肉体には曙の光が透き通つてゐました……」と。島の乙女が水を浴び、そして月明りが底の真砂をも數へ得る程に照し更に反射して豊艶なる肉体に投射する時、その水から浮き出た艶なる姿は上手の髣髴たる森から下り立つた精かと思はれた。

彼女等は瘦せてゐては美人の中間入りをすることは出来ない。西洋邊り殊に英國や佛國等ではやせぎすの輕快とか清楚とかと言ふのが美人たるの要素となつてゐるであらうが、島の乙女達は少し丸つぽちに肥えてゐることがその必要條件の一つであるだから彼の國の輕盈清楚とは反對に豐麗嬌艶と言ふのがその理想である。花に譬へるならば正に満開の牡丹である。小柄の柄で肉体が豐艶でそしてパツシヨンが全身に満ち充ちてゐるのが島人の理想的美人である。そして彼女等の黒い瞳は一見して全身にパツシヨンの溢れてゐることを表はしてゐる。睫が濃くて夢を包んだやうな眼でデット見られると大概の男性が身震ひする程魅惑されて終ふ。

私が此の詩の國、夢の國を去つたのは八月二十九日であつた。その前日即ち舊の七月十五日にはお盆でしたから例年の如く闘牛があつた。然し私の最も残念なことには、私はたつた五分後れた爲にその勇敢にして慍悍無比なる大闘牛を見ることが出来なかつた。

私は尙ほ書くべき多くのことを持つてゐる。然し餘りに幼稚な筆のよくする處でないから擱筆する。
要するに南國の乙女と泉、黄金色に熟れたバナ、の木と闘牛及び出船の面影等々は永久に私の胸に銘ぜられた思ひ出の一つとなるであらうことは確かである。